

坂井市旧三国町における三国祭の際の空間利用についての調査

観光まちづくりにおける三国祭の活用に関する考察 その2

三国祭	三国	観光まちづくり
歴史的町並み	空間利用	地方都市

正会員 ○森下 暢彦＊ 同 砂塚 大河＊
同 越野 あすか＊ 同 中井 雄太＊
同 矢吹 剣一** 同 中島 伸***
同 西村 幸夫****

1. 研究の背景と目的

豊かな生活風景を持つまちが持続してゆくためには、住民が住み続けられるまちであることが、住民にとっても、またまちを訪れる観光客にとっても重要である。その中で、観光振興を通じてまちの住民にも波及効果をもたらすことを目指す「観光まちづくり」が注目を浴びている。その中で、前稿（その1）では、三国祭とまちの関係を歴史的な成り立ちや来訪者・運営などの面から整理し、三国祭の観光資源としての可能性を評価した。

そこで、本稿では三国祭を日常のまちと観光まちづくりに活かすために三国祭の際の空間利用実態を明らかにすることを目的とする。

2. 調査方法と対象地区

都市構造と曳山巡行経路の関係性に着目して見せ場空間・巡り空間の型を平面的に明らかにしたものとしては倉橋（2004）があるが、本調査では、三国祭の際にまちの空間が具体的にどのように活用されているのかを平面・断面・立面の三つの視点から調査を行った。具体的な調査としては、以下の項目を調査した。

- (1) 物的裝飾調査
- (2) 溜まり場調査
- (3) 観光客行動調査

(1) および (2) では現地調査を行った。調査対象地域としては (1) では三国の旧市街地全域を対象とし、(2)

では、三国の旧市街地の特徴をよく表している松ヶ下区を対象とした。松ヶ下区は三国の市街地形成の歴史的な軸である北前通りを中心とした地区であり、北前通りの特徴である地形によって生まれたクランクが連続した地区である。また、三国の伝統的町家であるかぐら建てが集積していることも対象地区選定理由の一つである。調査日時は2015年の三国祭の前々日及び前日である。

また、(3)では手渡し・郵送回答によるアンケート調査を行った。調査対象は三国祭を訪れた見物客(地元・外部を問わない)で、三国祭当日に山車の巡行ルートが無作為に歩きながらアンケート配布を行った。

3. 調査結果

3-1. 立面から見た三国祭の空間利用 (図1)

(1) の調査から、北西方向へ行くほど三国神社の氏子であることを表す神札を出す家の割合が減り、三国神社の神輿が巡らない一方で、提灯など他の装飾を出す家の割合はそれほど減っていないことが分かる。このことから、三国祭が単に三国神社の氏子のためだけの祭ではなく三国旧市街地全域の祭りという意識を住民に持たれている可能性、また住民が狭い路地での山車巡行の見せ場空間の景観演出へ配慮する意識を持っている可能性が示唆される。

その中で、観光客行動調査の結果（図2）より、観光客が数多く通り、見せ場空間となっている三国祭の時のまちの重心と見なすことが出来る場所が抽出できる。

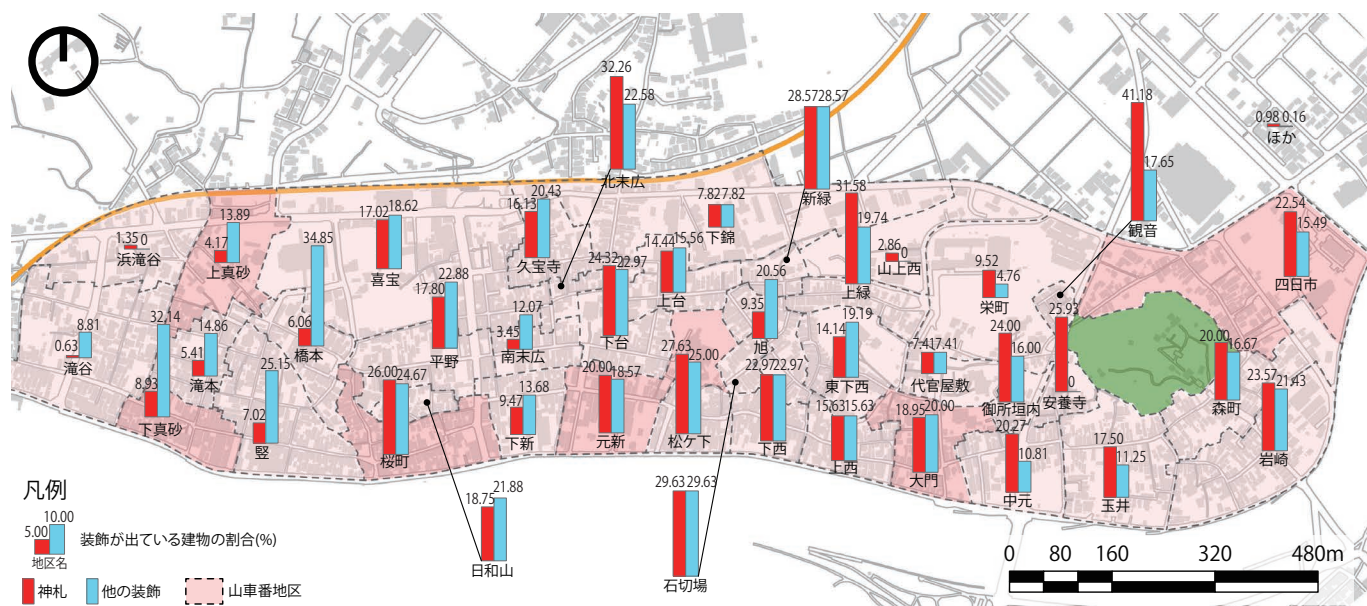


図1 各区における神札および他の装飾を出している家の割合

A Research on spatial use of Mikuni, Sakai City, in MIKUNI Festival:
Examination about Application of MIKUNI Festival in Tourism Community
Development (Part.2)

MORISHITA Nobuhiko, KOSHINO Asuka, NAKAI Yuta,
SUNAZUKA Taiga, YABUKI Ken-ichi, NAKAJIMA Shin,
NISHIMURA Yukio

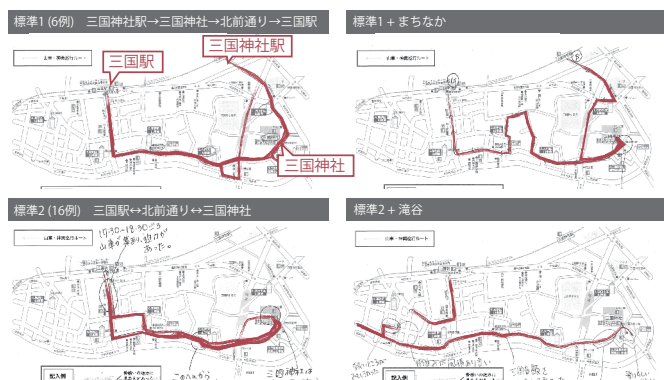


図2 三国祭における観光客の行動ルート

一方で、まちなかを回遊する観光客は少なく、観光客が通るのは主に鉄道駅と祭りの中心で出店が立ち並ぶ三国神社周辺を結ぶルート周辺に限定されていることが分かる。旧市街地全域にわたって祭りが展開されているにも関わらず、祭りを訪れる観光客との認識が一致していないことが課題と言える。

3-2. 断面から見る三国祭の空間利用 (図3)

図3は松ヶ下区のきたまえ通り沿いの断面図である。三国の伝統的町家であるかぐら建ての通りに面した表部分の軒下や、きたまえ通りの雁行・クランクによって民家の前面レベルがずれることによって生じる三角形の空間が山車巡行の際に見物客の溜まり場空間になっていることが分かる。また、住商一体であったかぐら建ての二階部分は座敷として用いられ、通りへの見えが確保された設えとなっている。また通りからもかぐら建ての二階部分が通りに向かって並んで見えるようになっている。

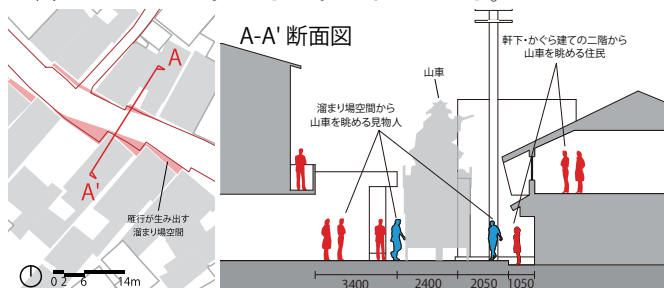


図3 松ヶ下区 北前通り沿いの断面図

この雁行・クランクや軒下に生まれる空間やかぐら建ての二階部分の空間などのように、三国祭によって引き立てられる空間や三国祭を引き立たせる空間が三国には多く存在する。これらの空間構造を活かせば、日常においても沿道との関係性をもったアクティビティを誘発させる可能性がある。

3-3. 立面から見る三国祭の空間利用

三国祭の風景を彩るのは山車や歴史的町並みだけでなく、3-2. で取り上げたように山車巡行などを楽しむ見物客の存在やまちなかの住民による装飾である。図4は三国祭

の当日にまちなかに出る装飾の類型を抽出した写真である。提灯や赤札にとどまらず、暖簾や簾、また手作りの灯籠などが祭りを盛り上げる空間演出となっていると考えられる。



図4 三国祭を彩る様々な装飾

また、図3で取り上げたようなかぐら建ての構造、すなわち短冊状の建物形状の通りに面した部分で商売を行う構造は、軒先に通行人が溜まりやすく、また装飾などを展示しやすい構造を生み出している。通りに面した部分を飾り付ける行為は日常においてもまちなかの風景に活気を生み出す可能性が考えられる。

4. まとめ

以上の調査より、三国祭において、祭と都市空間がどのように互いの魅力を引き立たせているのかということがマクロ・ミクロ両面で明らかになった。

一方で、近年の三国では伝統的町家であるかぐら建ての減少やセットバックの増加などにより歴史的な町並みが損なわれ、また空き家・空き地の増加や高齢化・人口減少などによりまちなかの空洞化が加速しており、まちなかの持続の危機にあると言える。

三国というまちにおいて大きな意味を持つ三国祭に現れる空間構造を、観光と日常生活に繋がるように活かす事が必要であるし、またそのような空間構造は地域課題とも関連しているはずである。例えば、三国祭では山車の巡行路の一番重要な道でもあるきたまえ通りは、日常的には戦後以降自動車交通が増えたことによって歩行環境としては悪化したと言える。しかし、これを日常的に祭に映える空間づくりと連動させて、街路のクランク形状を活かして憩える場をつくるとか、空き町家の二階を貸座敷にして観光客との交流の場とするとか、空き家を飾る活動を展開するなど、様々な可能性が考えられる。

三国祭というまちにとっての非日常と、日常の双方で一貫して鍵となる空間資源を見出して保全・活用し「観光まちづくり」へと活かす事が重要である。

【参考文献】

倉橋宏典 (2004) 「北陸の曳山祭における祭と都市空間の関係性に関する研究ー曳山の動きと都市空間の対応関係に着目してー」、東京大学修士論文

* 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 博士課程
 ** 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 助教
 *** 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 修士課程
 **** 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 教授

* Doctor course, Dept. of Urban Engineering, Graduate school of Engineering, Univ. of Tokyo
 ** Assistant Professor, Dept. of Urban Engineering, Graduate school of Engineering, Univ. of Tokyo
 *** Master course, Dept. of Urban Engineering, Graduate school of Engineering, Univ. of Tokyo
 **** Professor, Dept. of Urban Engineering, Graduate school of Engineering, Univ. of Tokyo